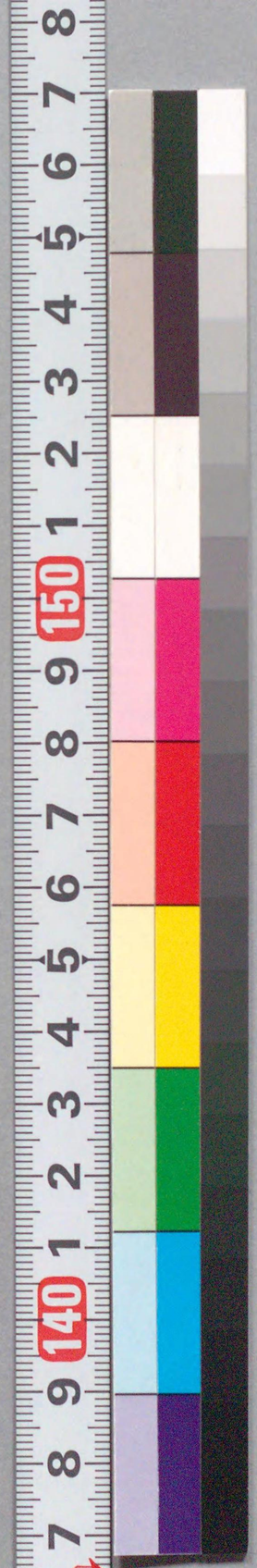
国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686



ガラス使用

208
12
686

糸柳後編

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

胴房新話 以登家内喜巻之五

江戸　爲永春水著

第九回

一間の中にハ直吉が兵右衛門の高輝に目を覚し四隅を
看れば遠まハ奈何の新地の茶屋と思ひの外お千代にあらで
お種といふ腹と二個鮫屋の中に躬を寝るせし爰の体情
ぬるに思ひまハ行にお千代ハ元来和哥町から音郷橋に行居
をしてまゝ以来にも新地の辺に居たりしとハなきものを兼て

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

彼所に在招に看なりし夢こそあやしけれ雖にお千代と添
寐せし思ひくゆゑにお種とも知らで契を結びたる招に覚の
ありけれバ千寐忽なるを悔めども今更にまた詮方なく
脱に兵右衛門が踏込んとなせる招子を吹ちとりて蚊性の中
より起出る折しもお種ハ目を覚し叔父兵右衛門の強ぶ
知らずや直吉の裳裾を引留め完爾笑に雲殿頻なるハ
志くも亦可恥て起出がたき後朝なれども彼兵右衛門が契
まれバ直吉ハいそがハしくお種の耳へ口を寄せまゝおもむきを

咡ゆゑお種も悔り怒るきつく同じく蚊性を立出しが寐るの
椽より庭へ出脊戸口から志のびやうに近所の家へ拯びに行
隠まる招なりて居たり此時おつまよハ兄を押止め一間へ入じと
乗へども手法の悪人兵右衛門ハ少しも聞ぬ姉を突除矣へ
踏込むを打ちゝ出なる直吉に行當り己が力に余されてや
たづゝを打て作向に倒るゝ脊後ハ板のるにていつしか朽おも
ありけれバ寐まき骸の兵右衛門が首より乳のあたりまで
椽の中へさかしまに自然とたまりて肩脊中をまりむく

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

痲や赤身の痛さ気も塞くなる苦しさに口をもがきて
蠢のこと探さん立ね小気味よき直吉は可笑も気の毒な
まゝに立かつてあつよと二人で夜抱し兼よみかと種々に
世話をなれば兵右衛門もままゝに腹は立ながらもまゝ
夜抱の禮を言ひ淄息を吐だりなり　直「トキニ」私は急切の
金谷作三衛さまから頼まれて參門さ直吉とやまれ者で
おざるまれが平文は此親類と只今兼りましたがあのまゝ
紙を此後じて何まよろしく此相談を成まれ根にお頼さ

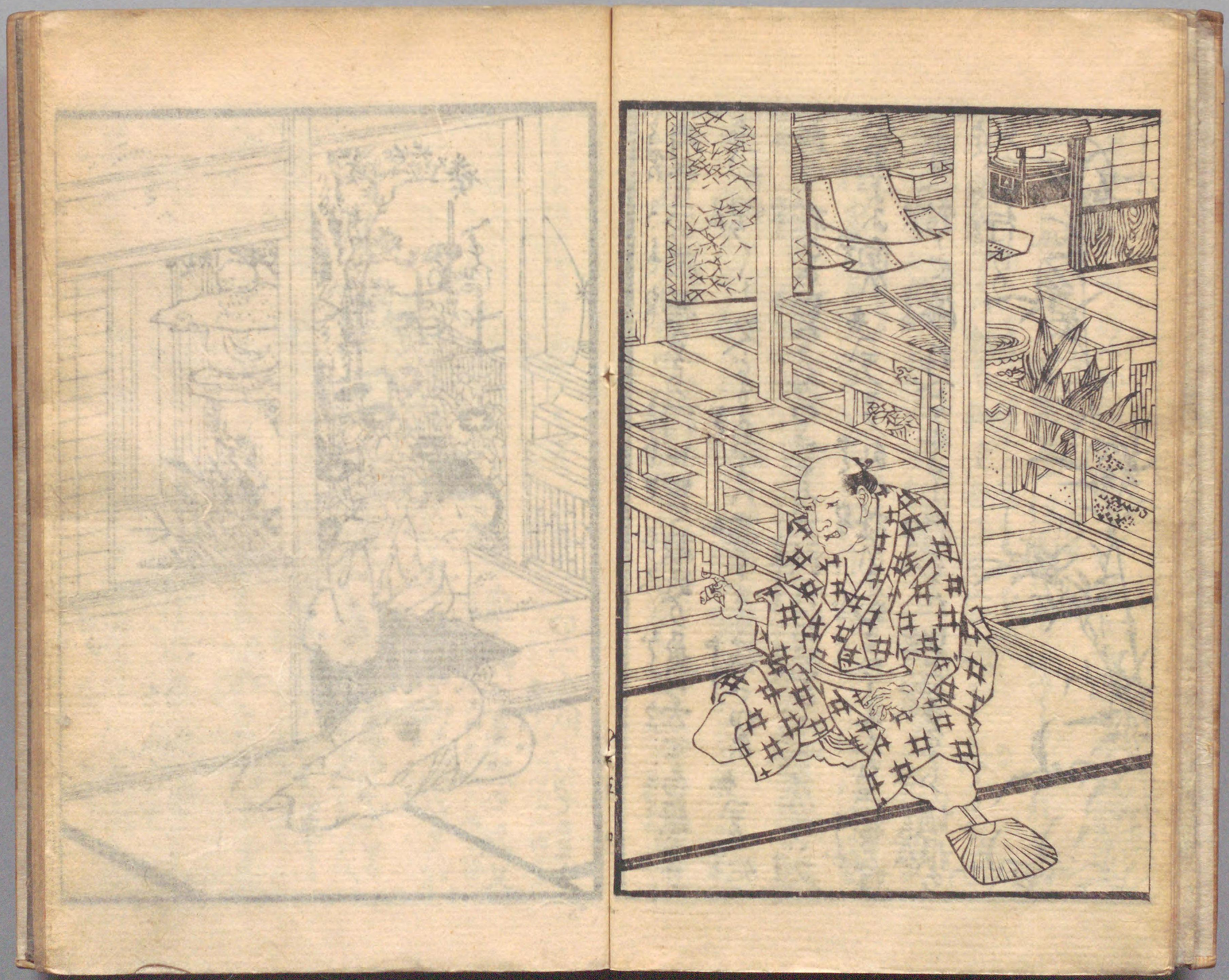
中まれ私も昨日途中の雷雨で大難義をいたしましたく
宅に労まましたれば今朝は大きに痛るにしましたを
いたしましたト正然と言ふし挨拶に兵右衛門も感を折れ
お種と淄寐の風義らしき姿を言ひ克もなれば元来
無筆のゆゑれば手紙の次第をおるゆゑく暫時返答なさ
ざりしが漸々に胸を定めて　手「エヤリ」作三衛さんからのおま
紙は委しひるゆも知りましたひが此家も大しひる後家持で
村中の死女にだりなりて居ましたを夫に付て此度婚姻

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

上九郎さまといふ お役人さまへ お種を進ぜる様に相談が
出来て母子とも安楽する仕合になりましたがそれを啓
ごとに日々は私も涙ぎ母子も安穏でゝ居ちまゝなひ
支ぐらゝ お前が此座が能棄ひご手續りに様る様に
お種にも言吹せてお呉社成作言藩後の不明は何様か
知らるひが此地の所は是非然して活ずを付まゝから
家内へも手通りにお咄し社成が宜どざるまゝドレ鷲
結さまへ結納の事挨拶をして来様ト已が勝手を言放し

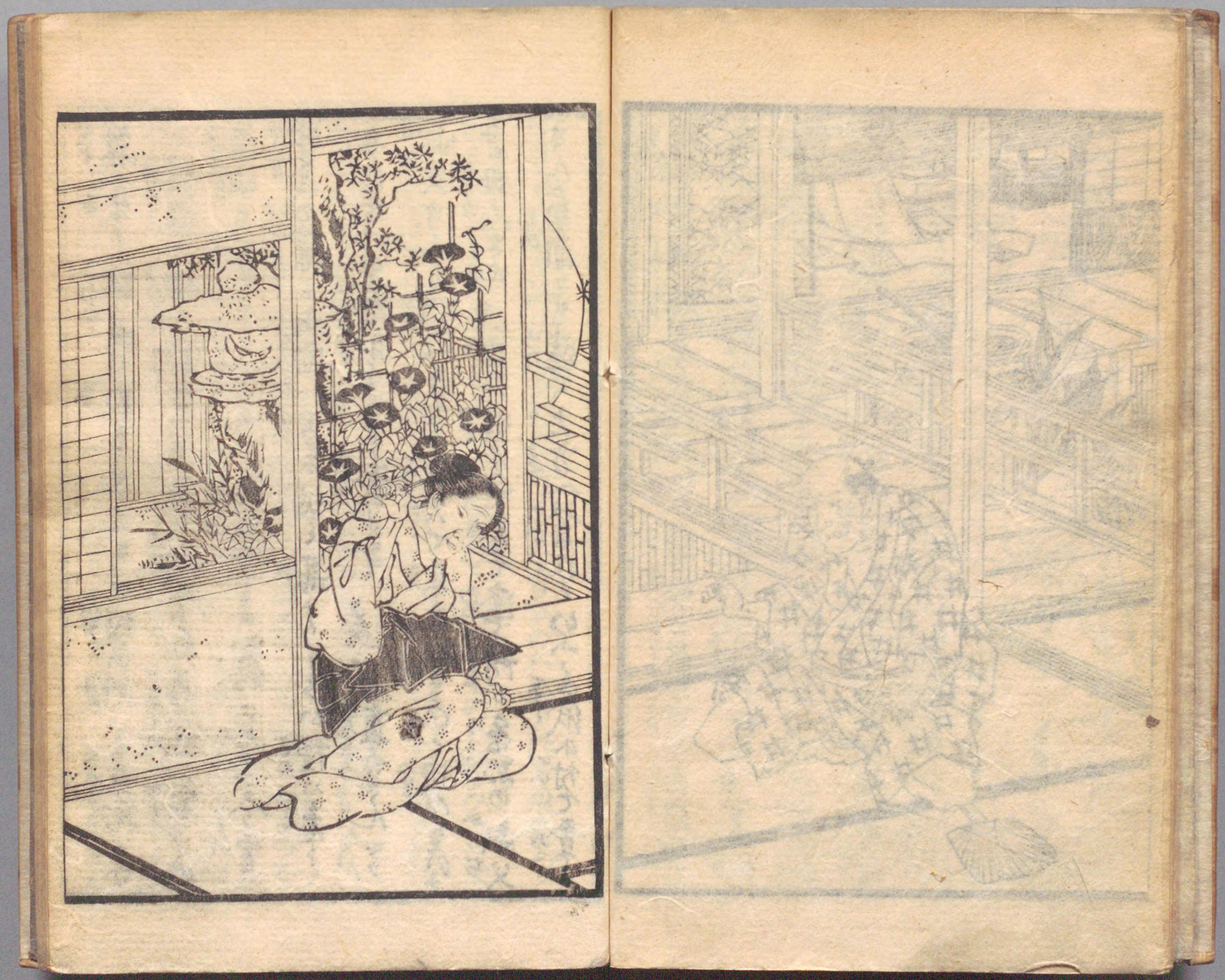
肩骨二の腕様なから門口出て根返り奥の方を白眼つけ
矣へお種々ト いへども奥ゝは居らざる様子ゆゑ 矣へ手ヲ伝
所へか抵びに出やかがつてそふご所為の悪ひト言ひつゝ又
おやまに向ひ 矣へ手ノ手ヲ外へ抵びに出さらしやんなエ鷲様
さまへ對して涙ねへこんごト憚まれ口を言なから頃根の
外へ出行けり

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用



国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

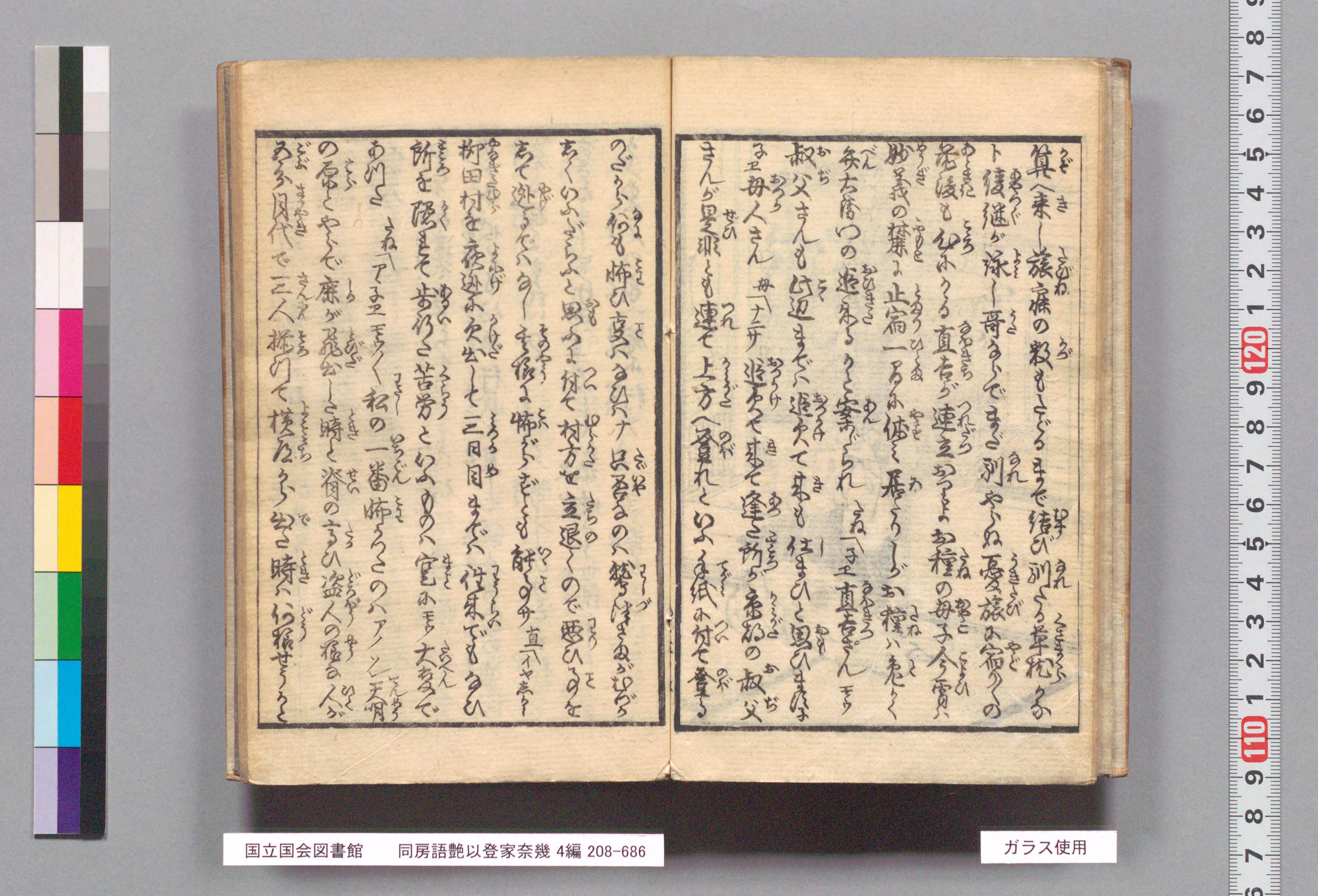


国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用



箕へ来し旅寐の数もとどるまで結び別たる草枕かな
ト後継が泳し哥ならでまだ別やらぬ憂旅に宿りくの
老後も私にかゝる直吉が連立おつとよお種の母子今宵ハ
胸義の葉に止宿一日に体ゝ居たりしがお種ハ老かく
矣右衛門の追来るかと案ぐられ　子丑　直吉ぎん　モウ
叔父さんも此辺までハ追来て来も住まひと思ひまゝに
子丑　母人さん　母　ナニサ　追来て来て逢た所が亲切の叔父
さんが是非とも連て上方へ登れといふ手紙に付て登る

のごから何も怖ひ変ハるひハナ只吾なのハ鶯泣きながむづか
しくいふごらふと思ふに付て村方を立退くので悪ひるのを
して逃るでハなし手紙に怖がらずとも能くのサ　直　イヤ来り
柳田村を夜逃に欠出して三日目までハ住来でもなひ
所を隠まて歩行た苦労といふものハ寛に　モウ　大変で
あれた　子丑　モウ〳〵私の一番怖かつたのハアノ天明
の原とやらで麻が飛出した時と脊の高ひ盗人の猛な人が
あか月代で三人揃ひて横屋から出た時ハ何程せうかと

思ひましたハ　母「然ばなにあの時ハ此身も戦栗としたけヨ
　　「然したらばなヱ三人の中で一人の人ハ直吉ぎんの知己
人で居を委しく教へて呉ましたけよへ　直「左様よノウ
あまが友達でなくちにものならば何様なわけ悔りさるのス
アヽナや彼人も何卒行状を直して鎌倉の家の勘当の
免る様にされバいくが　　「アノ怖らしひけまども好男で
おざるましたッけよ　直「アハ　お茶惣たら世活をしてよる
からあの人の家へ嫁に行サ　　「ヲヤ否なことをお言ざよへ

ト母に知らせざる様に直吉を可愛らしき眼もとにて
白眼　直「ヲヤく　無様に腹を立て否がるるのハなひハナ
如彼でも実家の宅ハ二世町の茶同屋で地面の二十ヶ
所もある大金持ごヨ　　「イヤく私ハお金も何にも
入ませんハ京都の伯父さんに逢ことでアノウ弟るのが
自由になる様ごと奇麗な少分家をちしらへて共同で
母人と三人で和合活業てさへ居まバ無外に閉ましハ
おざるませんヨ　直「母人とお茶とそまたら誰を入て

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

三人活業になるのだんト お種の顔を従容と看れバ
お種はハット仏母の思はく恥かしけまバ赤ぶむ 顔を
横にして とね「アノツイ言ことなりたのであります」ハなエト
ゆし腹を立て風情にてさし俯く此時脱に小夜更て
子ノ刻の鐘 ゴヲンノ〳〵 母「サア〳〵明朝とやく起られ
るひと行るひからまつ〳〵無言で 麻ませう〳〵 直利ン二
あしたハ山越をして追分へかゝるのだから気を付て出
行るひといけるひ。麻よかし〳〵ト三人ハ始て眠つたに

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

頃は七月の初旬殘つゝの暑さまだ強ければ朝風涼しき
夜中にかしも夏を魚がんと旅宿を出し直吉お種母の
おつまよも諸ともに幸ひ宿から連立旅人男女の同行
二人まだ年若き人々なるが男はかし病身らしく女は
田舎ものなれど息かたちは美麗なれば雪より白くして眼の
清涼につゝしきは若瓦かとも疑がるされど言葉も和
らかにお種と二人が手紙引き歩行山路の便よく力
草なる同音側よりも公楽しくていちくとする又人連

程なく夏のさかゆきて廣き原なぞうつゝける
春水あふに伏しているあるさかゆき草紙に自注をするも
晴呼がましけれど作り物語りたい人ども作者の筆
意に自由をなほことあたいだ一度筆を下しもまづ
直吉が佐倉の在へ行支を説出せばその行なる先の
掛田村の一條を綴り出さねばならぬ支となりますと
お種といふ腹の身の上となれば這が始終をあらし
つけて善悪邪正をあらぐく説るとなまりされば

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

茶くわしくしたる拙作に同じ場となることを厭ひ
彼是と同茶を新らしくなしべき為にかへ行て
古き趣向となるのミかへ 所繼めく座席艶落の
脇を浮意とせらるゝ看官の心に悖る類ひとなりぬ
しかわまとばとて好色の情を要として浮薄の人に
堂貌をきるゝとも勸善懲悪の一助とならばハ
作者の本意とハまべからば 丈巻中の男女に往々の
辛苦ならを見て身の用心となしなん

處女御達の要心

一 乳母卜女のさる世間だなし人の噂など喰べからば
一 茶わる腹たちハ酒宴の席へ招かるゝ亦丈を腹に
まゝめて導引者に由斷まべからば
一 踊りまわるひハ浮留理を語る腹ゆたちハ田舎の祭禮
亦ハ芝居の僧しなどに連出さるゝ事の用心まべしまべて
千面白きものと金になることを甘味言ゆつせ欺しまう
あて引出さものなり

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

さんも来るひ様人　柳ヘア　然ハ何様仕ましたるの
一件もあるから是非とも来てゐるものごと思つて居ました
ハ何にしても能相談をして来るひけまだるゝるひ子　千ヘア
丈にしてもアノ直さんハアノ何様志さんごとうす工実に幕に
言のも面目るひ様ごヨ此度とそハ宮祐の変さんあるもの
だから何様しても心頼になる様にと急度して約束を
ちて別まさのごアまさ勿論私の方も小児でも出来てゐる
ものごから立流に能といふ理ハるひから男の公持でハ不

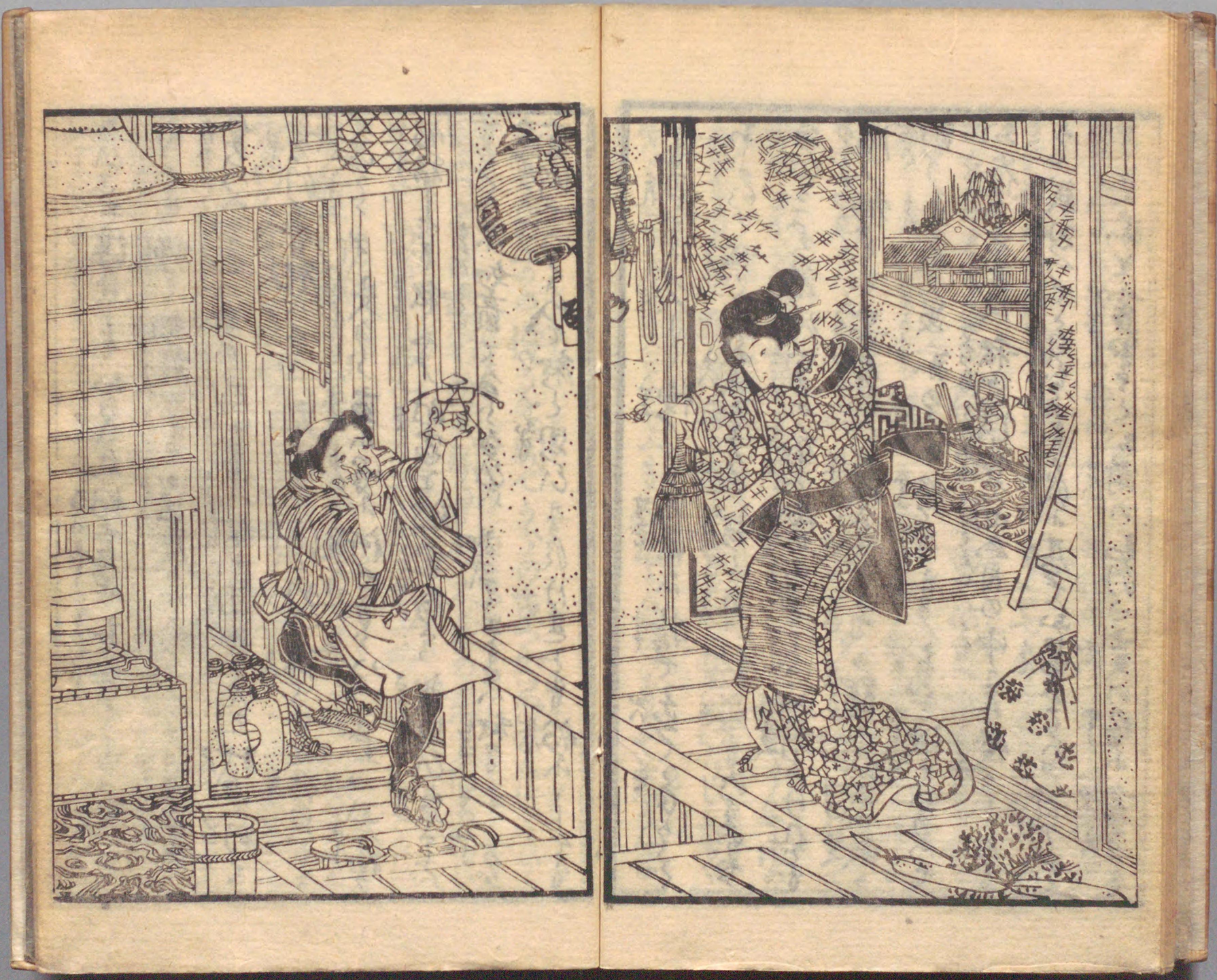
貞仕方ごと思ひしこうハ知らるひが如彼に大丈夫に
頼母しらしく言こ様でも一向に沙汰のるひのハ私が
欺きまこのごと思ふハ　柳ヘナアニまさう然でハ在ましまひヨ
何ら陥義るい変て早く此方へ来ふまるひので在ませんな
千ヘイエ今更考へて来ましまバ則り私の仕方をうるく思つて
居るから体よく私を拝んで行このごと思ふヨトゆし涙を
偕し墨り変ゆて　千ヘるんが此男に言解のるひ事が
あまバといつて何も支ゆど援を立て居ましまバと能そゆる

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

るちやうなひかな也あの人が宮初の通りにして居て呉
まば形のよ男になりハ志なひのごとく七八年音沙汰なしに
志て無さ千身の落度がある曲に此度亦出て来て私を
欺かして行ぎとも能きそうなものゞ私しやう寛に悔しい
ハトおぶへかねさる女の情涙を捺へたらくゝ繻伴の神にて
眼のふちを拭ひながらも噎び入　柳「アレサ姉上さん千様に
氣をもむと猶埃梅が悪くなるハ當時いよく寛く
知つておまゝな史とそどふも仕様がなひヨそして直さんだ

ても是まで久しく便りも不為に捨て無て多くなく
ちかれと欺かし度だりで然く舞ねて来もあまいじやう
なひかな也生徒男の様な潔白としたお前ざけれども
悔り種々と苦労を所成ざらく氣が弱くお成の故か
則り更じやう黒痴の人の様ごヨまア氣を強くおもつて
お在な急度私が請合て四五月の中すハ便りがある
から然思つて氣をもまづに居てお呉なさいヨ　千「アヽナニ
了黒痴を言出すとお前の知れた支の様に言るのも

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用



国立国会図書館　　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

持て来りまほ　柳へ久しい様ごヨ　拝んでだろう　歩切てあつ
初児様よ　手拝を呉さから堪恵して来ふノウト　言るがら
与次郎の湯の人形を手に　請取　脊後を振向　柳へ姉上さん
此手拝ハ持て行て来りまほヨ　千へアイヨあの小僧どんハ宮に
子奴悩ばハト言を聞て出行お柳　酒屋の小僧ハ手拝び
賣の口まね似して　小へ年が寄ってもまごく　志やアんと来イ。
伊勢屋でおざる。ホイまざ此徳利ハ酒がありまほト路
次口の家へ挨拶し　小へまごく　志やアんと来ハト志やべり

ちらして行小僧が戯をおともお千代が辻占彼此湯が
達者なる音信もやと思ふならんか程なく表の格子戸
の音グワラくし　千へ誰人　市へまさくし引イツ　千へヲヤ市
ざん久　市へハイくト中安居の障子をあける　千へヲヤもは
居る市ざんどおそろしいなぶい私ごそエアレサそして今お
柳が今お茶を呼に行と言て出て行ふ子エまざ近所に
居るごらふ　市へヲヤ然か何方から行ふ子　千へ裏口から出ごヨ
新居の方へ行のごから　市へエ十二新是エ此所に新居がある

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

ものか亦たしかに自分考で新道と名を付ておゐたのだ
らふよ　千ヘアレサお力さんの宅へ往たらふよ　市ヘアハ〳〵お力伯母
の所の支か彼所ハ新道じやゆねへ裏通りだア　千ヘアレサ何
でも能からうア早く追ひて行て呼返してお呉な　市ヘ丑お力さん
宅の方へ行ちやゆ些此身が往ゆくひつのがあるよ　千ヘヲヤ
何故だ至モ不都合ねへお茶が折角来てお呉で嬉しいと思
へバ御女が行違つて仕まふしモウ〳〵君の悪ひ時にやアマア何
故此様なものだらふよ　市ヘ十二能やゆナ先へ往たらて此身が

居るひといへバ直に深川て来るハよ　千ヘアレサ交だらても御
女がまた邑非お茶に逢ふと思つて諸方さがして歩行と悪
ひハよ不如意市さんだヨ何故またあの町内へハ行まるひのだ
ねへ　市ヘナニサ行まるひといふわだの支もるひがお町さんの所ヨ
千ヘなぜ町さん所が何様しらんだ人アノ性悪な支を知りて
居るから お茶も何様ぞ成り　市丑ナニサ千様な理ならバ
何も言分ハるひのスそして何も急度あまとの家の茶を
通りちやゆ悪ひといふまじもるひが只宅かし往ぞに居

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

るを本に母人が町さんと同意になつて種々な眼をのふから
困らアナそして此身が此家へ来る事を寔に何ごの角ごのと
悪言らしく的言からうるさくつてなるやか仕なひハナまさ
今日あたりちよひとでも立寄ふものなら捕まへて種々な
事を言ごらかと思ふからの事サ何もあの町内へ住れるひと
はふれどの事でハなひのス

作者曰大事の相談の頼しにまる人が如形人でハおし
も無に立ぬ人の様なまごとも解り理屈の行届く人ぞ

最初から嗅女や娘の友達ゆも頼しにもせらるゝもの
にハならぬさまだとそ男たるべきものが何るのも右の如き
風情ハあらぬ只嗅女なぐく交合とまハ自然たらひも
なき様に在と知るべし

宗衣着てハ行所やら行丈の
行ハね姿乃見ゆるなりけり

春路

同房新話 以登家内喜巻之五了

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686
ガラス使用

208
12
686

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

208
12
686

国立国会図書館　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用

国立国会図書館　　同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用